

新潟大学課題別副専攻「平和学」
Peace Studies as a Second Concentration, Niigata University

ようこそ「平和学」へ

新潟大学課題別副専攻「平和学」のページ

戦争だけでなく、貧困、不正、差別、抑圧などもなくすことを目指す平和学

お知らせ

教員3人の定年退職、1人の他大学転出により大学の専攻としての質の保証ができなくなるため、不本意ながら、
2016年度以降入学者(2016年度入学者とみなされる編入者を含みます。)については副専攻「平和学」を休止します。

、2018年度から、Qコード3科目をGコード科目(新潟大学個性化科目>自由主題)に転換しました。
科目区分が異なると同じ名称が使えないため、科目名もわずかに変更になりました。

- 蓮井誠一郎非常勤講師(茨城大学教授)「開発・環境と平和」(夏季集中)
- 高橋敏哉非常勤講師(松蔭大学准教授)「平和と現代のグローバル安全保障論
(Peace and Contemporary Security Studies)」(夏季集中)

■山田浩史非常勤講師(新潟国際情報大学講師)「平和学概論」(第3クウォーター金曜4-5限)
(「平和学入門」からの転換です。「平和学入門」は2017年度の開講をもって終了しました。)

- 2011年5月24日、課題別副専攻「平和学」オリジナル・ページ(このページ)を開設しました。
- 2011年5月24日、課題別副専攻「平和学」科目の「平和と現代の国際(グローバル)安全保障論」の履修者の自律的発展学習ためのページを開設しました。

2014年は第一次世界大戦勃発から100年、2015年は第二次大戦終結から70年です。第一次大戦を経験した人はほとんど亡くなり、第二次大戦経験者も少なくなりました。過去70年間、日本国内で戦乱は無いので、日本で生まれ育った学生にとって戦乱は想像し難いことかもしれません。しかし、1945年以降も、朝鮮半島、インドシナ等、日本のすぐ近くでも大きな戦乱により多くの人が苦しみ、その影響はまだ残っています。中東、東欧、旧ソ連、アフリカ等では、戦争や内戦がいつまでも終結しません。更に、カンボジア、ルワンダ他では、戦乱とは異なる形での大量虐殺が行われ、南西アジア、北アフリカ、西アフリカ等では、いわゆるテロリストが一般市民をも対象に殺戮を繰り返しています。このように、国家間の戦争に加え、内戦、そして必ずしも兵器によらない殺戮等が行われるようになり、世界では多くの人が亡くなったり、命を脅かされたりしています。世界の人々が国境を超えてますます強く結びつき、依存し合っている現代において、70年間戦乱の無かった日本の人々にとって、ひとごとと放置できない問題です。



沖縄本郷南部に多数ある鍾乳洞の1つのアブチラガマ。本土攻撃を少しでも遅らせるために徹底抗戦を命じられた日本軍はこれら鍾乳洞に立てこもるなどしたが、爆弾を撃ち込まれたり火炎放射器で焼かれたりしてほぼ全滅した。しかし、アブチラガマは規模が大きかったことにより、日本軍が最南部に逃げた後、残っていた重症の傷病兵や住民が生きながらえ、敗戦後に投降した。戦後にゴミ捨て場等になっていたものを住民や市民団体が掘り起こし、予約制で見学できるようにした。図の赤紫部分は朝鮮人慰安婦がいた場所で、ひめゆり部隊は立ち入り禁止となっていた。



「ベトナム戦争」中の戦闘で破壊された高校
(ベトナム中部、2009年)



インドシナ戦争取材中にアンコールワット
近くでボルボト派に殺された写真家
—ノ瀬泰造の現地の墓(2014年)



戦闘で破壊されたアパート
(ボスニア・ヘルツェゴビナのモスタル、2008年)



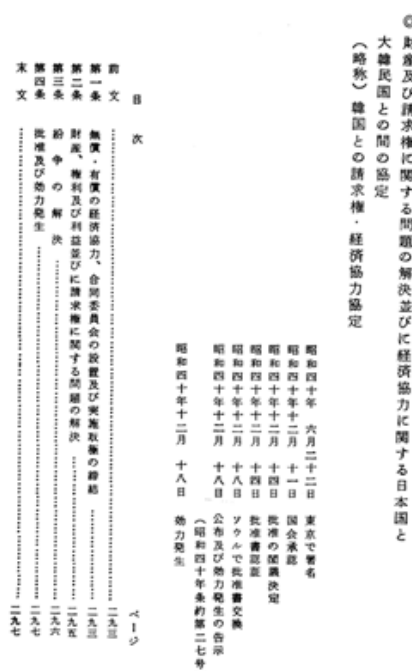
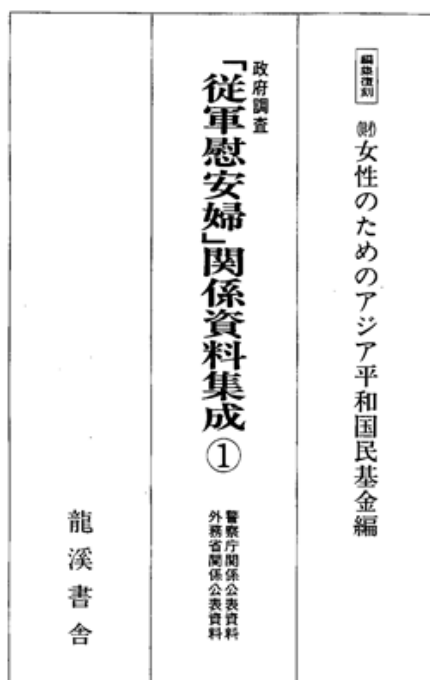
残された地雷や不発弾の数も
おびただしい。
(カンボジアの地雷博物館)

他方で、第二次大戦末期に広島と長崎で投下された核兵器は、その後、戦争での使用例は無いものの、米ソの対立の中で開発競争が進み、大量に蓄積されました。ソ連崩壊以後、両陣営による開発競争はなくなったものの、更なる高性能化が図られているばかりか、保有国が拡大しています。ひとたび使われれば極めて大きな犠牲を出す核兵器の廃絶も、依然として重大な課題です。



国連軍縮会議in新潟(2009年)

慰安婦問題、「領有権」問題等、1945年までの力による国家・人間集団関係の負の遺産の清算さえも残ったままです。



戦争のない状態=「平和」と考えるひとが多いと思います。しかし、たんに戦争がない状態だけでは「平和」とはいえません。戦争がなくても、**貧困、不正、差別、抑圧などが社会にある限り、人々は安心して暮らすことができず、これは「平和」ではありません。**ノルウェーのヨハン・ガルトゥングは、**貧困・差別・抑圧などを「構**

造的暴力」、直接的暴力だけでなく構造的暴力もない状態が「平和」なのだと定義しました。そして、世界の至る所に、そのような構造的暴力が見られます。日本社会にも、貧困から抜け出せない人たち、社会的出身や人種・国籍による差別、ジェンダー差別など、構造的暴力が見られます。日本国内にも「平和」でない状況が少なくありません。



脱北者が越える冬の豆満江
(2003年)



まだ深みに水のたまっている
乾季の始まりの川に
水を飲みに来た豚の親子(中央)。
しかし、住民も同じ水を飲む。
(ブルキナファソ、1996年)



校舎は父母がボランティア
で
修理しているが、校長以外
の
教員の配置されていない
マダガスカルの村の
小学校(2005年)



政権にとって危険とされた
知識人等が拘束され、
拷問を受けていた
カンボジアの施設(2013年)



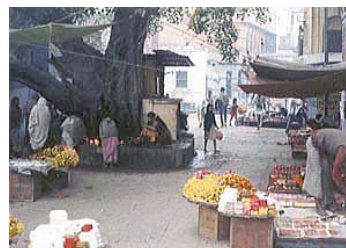
大虐殺を行ったポルポト派幹部を裁く
カンボジア特別法廷(2014年)



住民が団結し、良質な編み物、
交代での民泊等により得た
現金収入で自宅につけられ
た
太陽光発電パネル
(チチカカ湖のペルー側にある
タキーレ島、1998年)



アンコールワット周辺で
土産物を売る子供たち
(2011年)



日中、大木の根本の祠に花を
ささげる人々。夜は路上生活者
が毛布にくるまって寝ていた。
(インド・ヴァラーナシ、1988年)

氷点下10度以下に下がる
冬のニューヨークの夜の公園のベンチや路上、
商店の軒先などでも、毛布にくるまって
寝ている路上生活者が大勢見られる。
無防備な黒人の青年が警察官に
銃で撃ち殺され、それに大勢が抗議する
という事件も繰り返されている。
グアンタナモ基地では、
拷問が繰り返されてきた。

国連人権理事会の見解(2014年8月20日)は、
日本には多くの人権上の問題があると
している。

国境なき記者団による各国の報道の自由の
評価(2015年版)では、日本は180か国中61位
であった。

日本の報道の自由についての国連人権理事会
の調査者の訪問を日本政府は拒んだ
(2015年12月)。

高度成長により、「一億総中流」とされ、貧困問題はなくなったと
日本人は思い込んでいた。しかし、実際には、それに取り残された人たちがいた。路上
生活者等の貧困層のほとんどが、元々貧困問題に直面していた層であって、その貧困から
抜け出せずにいる。更に、目につかない貧困層、住民票や更には国籍が無いために、医療、
教育等、最低限の社会保障も受けられない人々がいる。

貧困にあえぐ人が暴力をふるうと思ひ込む人がいるが、路上生活者が石を投げつけられたり
体に火をつけられたりして亡くなる事件はあっても、その逆の事件はないのが、日本以外
を含めて事実である。自らの生活を良くする力を奪われている人たちが、悪者にされ、
同時に、社会を良くするための議論や行動に参加することもできず
にいる現実がある。

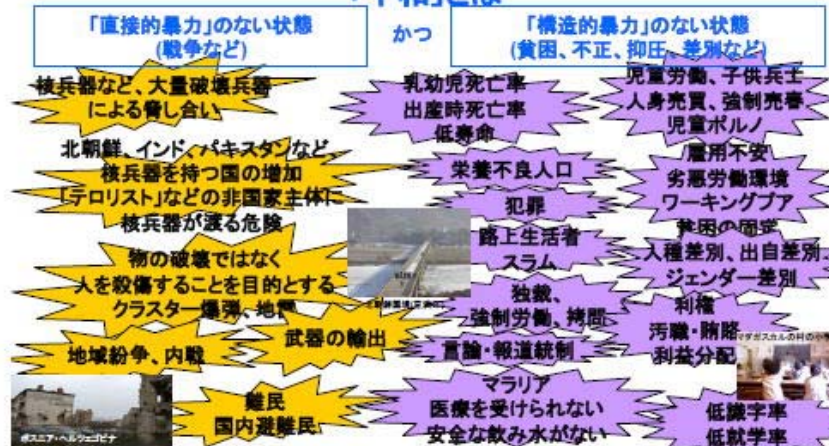


課題別副専攻「平和学」

平和、人権、開発

安全で、みんなが穏やかに暮らせる社会を考えてみよう。

「平和」とは



開講科目の種類

課題別副専攻「平和学」では、

- 基礎的課題に関する科目(国際法、国際関係論など)
- 直接的暴力に関する科目(安全保障論など)
- 構造的暴力に関する科目(人権、開発など)
- 地域的課題に関する科目(東アジアなど)
- 実践的課題に関する科目(「平和を考える」)

を開講して、世界や日本で人びとの平穏な生活が脅かされる状況を直視し、**戦争のないことに加えて、人間の尊厳を回復できる国際社会の条件を広い観点から考えます**。「平和学」の履修により、**世界の人たちのことを自分に関わることとして考えられる、21世紀にふさわしい国際人**になってもらいたいと願っています。

到達目標

1. 消極的平和を阻害する現状を認識し、その原因を考察できるようになる。
2. 積極的平和を阻害する「構造的暴力」の現状を認識し、その原因を考察できるようになる。
3. 平和・人権・開発問題の相互連関を認識できるようになる。
4. 上記の認識・考察を踏まえ、積極的平和に向けて主体的に行動できるようになる。

これまでの副専攻「平和学」の修了認定者の数と所属学部

年度	人数	認定者の所属学部
2007年度	2	教育人間科学部、法学部
2008年度	1	教育人間科学部
2009年度	1	教育人間科学部
2010年度	2	教育人間科学部、工学部
2011年度	0	(途中放棄)
2012年度	0	(2名(法学部及び経済学部)が申請したが、修了要件を満たさず。)
2013年度	1	法学部(別に1人(法学部)が要件を満たしたが、2014年度卒業予定のため、修了認定も2014年度の予定。)
2014年度	2	法学部(2013年度に修了要件を満たしていた学生)、人文学部(別に1人(人文学部)が事実上要件を満たしたが、2015年度卒業予定のため、修了認定も2015年度の予定。)
2015年度	3	2014年度に事実上要件を満たした1人を含め、5人が申請(人文学部2、教育学部1、農学部2)。2人は修了要件を満たさず。ほかに2人が事実上要件を満たしたが、2016年度卒業予定のため、修了認定も2016年度の予定。
2016年度	2	2015年度末に事実上修了要件を満たしていた上記2名。いずれも法学部。
2017年度	1	法学部。ほかに2人(法学部、工学部)が申請したが、修了要件を満たさず。

2018年度	0	(総合演習と修了ペーパーを履修すれば修了認定要件を満たす学生が、卒論の負担のために修了を断念しました。)
--------	---	--

これまでの修了ペーパーのテーマ

副専攻「平和学」の修了認定要件の一つに、卒業論文の半分程度の分量(約1万字)の「修了ペーパー」の提出があります。2012年度までに提出されたペーパーは全て積極的平和に関わるものでしたが、2013年度には消極的平和に関わるペーパー1篇が提出され、2014年度のペーパーは全て消極的平和に関わるものでした。しかし、その後はまた積極的平和に関するものが主体になっています。

●「平和と現代の国際(グローバル)安全保障論」履修者の自律的发展学習のためのページ

2011年5月24日開設。図解によるわかりやすい解説もあります。

●平和学関係リンクのページへ

各年度の副専攻「平和学」経費での購入図書等のお知らせ

2018年度

- Amartya Sen, *Collective Choice and Social Welfare: Expanded Edition*, Penguin, 2017年。1970年の *Collective Choice and Social Welfare* にその後の成果を追加したものです。日本における社会的選択論の最も包括的な著作である佐伯胖『決め方の論理：社会的決定理論への招待』(東京大学出版会、1980年)と併せて読むとわかりやすいかと思います。
- 田中哲也『フード・マイレージ 新版 あなたの食が地球を変える』日本評論社、2018年
- 大橋正明他『非戦・対話・NGO: 国境を越え、世代を受け継ぐ私たちの歩み』新評論、2017年
- 旗手啓介『告白 あるPKO隊員の死・23年目の真実』講談社、2018年
- 上杉・長谷川『紛争解決学入門:理論と実践をつなぐ分析視点と思考法』大学教育出版、2016年*
- 篠田英朗『平和構築入門：その思想と方法を問いなおす』筑摩書房、2013年
- 藤原帰一・大芝亮・山田哲也(編)『平和構築・入門』有斐閣、2011年
- 福武慎太郎・堀場明子(編)『現場<フィールド>からの平和構築論：アジア地域の紛争と日本の和平関与』勁草書房、2013年
- 伊東孝之監修『平和構築へのアプローチ』吉田書店、2013年
- 山田紀彦(編)『独裁体制における議会と正当性—中国、ラオス、ベトナム、カンボジア』アジア経済研究所、2015年
- 岩崎育夫『入門 東南アジア近現代史』講談社、2017年
- 山本敏晴『あなたのたいせつなものはなんですか?—カンボジアより』小学館、2005年
- 天川直子(編)『カンボジアの復興・開発』アジア経済研究所、2002年
- 稲田十一『社会調査からみる途上国開発—アジア6カ国の社会変容の実像』明石書店、2017年
- 岩田正美『貧困の戦後史』筑摩書房、2017年
- 橋本健二『新・日本の階級社会』講談社現代新書、2018年
- 館野雄貴『日本の児童養護施設と東南アジアの孤児院』医学と看護社、2017年
- 西田 芳正他『児童養護施設と社会的排除-家族依存社会の臨界』解放出版社、2011年

2017年度

- 小泉康『グローバル・イシュー：都市難民』ナカニシヤ出版、2016年
- 米川正子『あやつられる難民: 政府、国連、NGOのはざままで』、ちくま新書、2017年
- 滝澤三郎他『難民を知るための基礎知識—政治と人権の葛藤を越えて』明石書店、2017年
- 中嶋哲彦他『子どもの貧困ハンドブック』もがわ出版、2016年
- 浅井春夫他『子どもの貧困の解決へ』新日本出版社、2016年
- 東 智美『ラオス焼畑民の暮らしと土地政策—「森」と「農地」は分けられるのか』風響社、2016年
- Yuto Kitamura他『*The Political Economy of Schooling in Cambodia 2016: Issues of Quality and Equity*』Palgrave Macmillan、2015年

2016年度

- 広島市立大学広島平和研究所(編)『平和と安全保障を考える事典』法律文化社、2016年
- 遠藤正敬『戸籍と国籍の近現代史：民族・血統・日本人』明石書店、2013年
- Oliver Ramsbotham, Tom Woodhouse and Hugh Miall『*Contemporary Conflict Resolution*』Fourth Edition, Polity, 2016
- Jean Drèze and Amartya Sen『*An uncertain glory : India and its contradictions*』Penguin, 2014

2015年度

- Masahide Ota: *This was the Battle of Okinawa* 96pp. 那覇出版社、1981年
- 『記録写真集 沖縄戦と住民』207pp. 月間沖縄社(発売: 新日本教育図書)、2002年(第3版)
- 沖縄県高教組教育資料センター『ガマ』編集委員会(編)『沖縄の戦跡ブック『ガマ』』改訂版、192pp. 沖縄時事出版(発売: 沖縄学版)
- 谷山博史(編著)『「積極的平和主義」は、紛争地になにをもたらすか?!-NGOからの警鐘』合同出版、2015年
- 嶋田晴行『現代アフガニスタン史』明石書店、2013年
- Woodhouse, Tom/ Miall, Hugh/ Ramsbotham, Oliver/ Mitchell, Christopher, *The Contemporary Conflict Resolution Reader (Paper back)*, Polity, 2015
- 堀芳枝(編著)『[学生のためのピース・ノート2](#)』、205ページ、[コモンズ](#)、2015年4月、本体価格2,100円
恵泉女学園大学の平和学の教科書の改訂版です。集団的自衛権、歴史問題、「積極的平和主義」、ヘイトスピーチ、機密保護法等、最新の課題までカバーしています。様々な大学の教員等が分担執筆して「平和」に関わる諸課題についてその課題の専門家として意欲的に論じていること、国家にとらわれない視点も大きな特徴です。2016年度から「平和学」入門の教科書とすることを検討しています。
- 木戸衛一(編)『[平和研究入門](#)』300ページ、大阪大学出版会、2014年4月、本体価格2,300円
堀芳枝(編著)『学生のためのピース・ノート2』に比べると網羅的に見えます。大阪大学の教員が執筆していること、日本国内の視点が強いこと及び大阪付近の事例の紹介が多いことが特徴です。

2014年度

- 谷勝英『アジアの児童労働と貧困』ミネルヴァ書房、2000年
- 香川孝三『グローバル化の中のアジアの児童労働—国際競争にさらされる子どもの人権』明石書店、2010年
- 中村まり、山形辰史(編)『児童労働撤廃に向けて—今、私たちにできること』(アジ研選書)、アジア経済研究所、2013年
- 佐々木宏『インドにおける教育の不平等』明石書店、2011年
- 下渡敏治、上原秀樹『インドのフードシステム—経済発展とグローバル化の影響』筑波書房、2014年
- 林博史『暴力と差別としての米軍基地』かもがわ出版、2014年
- 遠藤美幸『「戦場体験」を受け継ぐということ』高文研、2014年
- 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー 新版』岩波現代文庫、2012年
- 川口章『日本のジェンダーを考える』有斐閣、2013年
- 朴裕河『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘い』、朝日新聞出版、2014年
- 日野啓三『ベトナム報道』講談社文芸文庫、2012年
- 平山裕人『アイヌ史を見つめて』北海道出版企画センター、1996年
- 名嘉憲夫『領土問題から「国境画定問題」へ—紛争解決論の視点から考える尖閣・竹島・北方四島』、明石書店、2013年
- Pk. Md. Motiur Rahman, Noriatsu Matsui, and Yukio Ikemoto, *Dynamics of Poverty in Rural Bangladesh*, Springer, 2013
- Oliver Ramsbotham, Tom Woodhouse, and Hugh Miall, *Contemporary Conflict Resolution :The Prevention, Management and Transformation of Deadly Conflicts*, 3rd Edition, Polity, 2011

2013年度

- 鹿島平和研究所(編)『現代国際関係の基本文書』(上)、(下)、日本評論社、2013年
- 前泊博盛『沖縄と米軍基地』角川書店、2011年
- 高橋哲朗『沖縄米軍基地データブック』沖縄探見社、2011年
- 長元朝浩、石川真生、国吉和夫『これが沖縄の米軍だ—基地の島に生きる人々』高文研、1996年
- 神保哲生、宮台真司、真喜志好一、伊波洋一、大田昌秀、我部政明『沖縄の真実、ヤマトの欺瞞—米軍基地と日本外交の軌』春秋社、2010年
- NHK取材班『基地はなぜ沖縄に集中しているのか』NHK出版、2011年

2012年度

- アムネスティ・インターナショナル日本(編)『グアンタナモ収容所で何が起きているのか —暴かれるアメリカの「反テロ」戦争—』、合同出版、2007年
- アジア・太平洋人権情報センター『アジア・太平洋人権レビュー』現代人文社: 1997年版から2011年版

- 1997 国連人権システムの変動
 - 1998 アジアの社会発展と人権
 - 1999 アジアの文化的価値と人権
 - 2000 アジア・太平洋地域における社会権規約の履行と課題
 - 2001 ドメスティック・バイオレンスに対する取組みと課題
 - 2002 人種主義の実態と差別撤廃に向けた取組み
 - 2003 障害者の権利
 - 2004 企業の社会的責任と人権
 - 2005 国際人権法と国際人道法の交錯
 - 2006 人身売買の撤廃と被害者支援に向けた取組み
 - 2007 人権をどう教えるのか
 - 2008 新たな国際開発の潮流
 - 2009 女性の人権の視点から見る国際結婚
 - 2010 企業の社会的責任と人権の諸相
 - 2011 外国にルーツをもつ子どもたちー思い・制度・展望
- Emanuel Adler and Michael Barnett (eds.) "Security Communities" Cambridge University Press, 1998 (草の根交流が外交官等による公式な交流を上回る国々の間では武力行使が無くなるとする安全保障共同体論の基本書籍。和訳はありません。)
 - Keohane, Robert O. and Nye, Joseph S. "Power and Interdependence" 4th Edition, Longman, 2011 (安全保障共同体論の裏返しでもある、複合的相互依存にある国々の間では、軍事的安全保障が最上位の課題になることがなく、多様な課題を巡って多様な主体が交流し、武力で脅して政策を変更させるようなことがないとする複合的相互依存論の教科書の最新版。1977年の初版以来、和訳はありませんでした。漸く2012年8月、ミネルヴァ書房から『パワーと相互依存』として出版されましたが、これは2000年に出た第3版の訳です。第4版では、現代の状況に合わせた細かい修正等が多数行われているため、現代の若い読者には理解しやすいと思われますが、論点は、第3版と大きく変わるものではありません。)
 - アマルティア・セン (著), 大門毅 (編), 東郷えりか (訳) 『アイデンティティと暴力: 運命は幻想である』 (原著: Identity and Violence) 勁草書房, 2011年 (「民族」、宗教、国籍、職業、趣味、卒業校、等々の多様なアイデンティティが同一個人の中にいくつもある事実と、それを個人的、社会的その他の理由によりその時々で選択している事実を指摘。我々は、色々なアイデンティティを使い分け、多様なアイデンティティの多様なネットワークを更に強化することにより、生活をより豊かにし、また、紛争を避けることができる。)
 - アマルティア セン (著), 池本幸生 (訳) 『正義のアイデア』 (原著: The Idea of Justice) 明石書店、2011年 (人の多様な状況から、理想論で一致するのは難しい。正義論は、そのような理想を論じるのではなく、現実にある見過ごせない不正義(人間としての尊厳が確保されていないような生活など)の除去等を目指すべきであること、ムラ社会の考え方(parochial)でなく、他の世界の人たちからも広く学び、また、他の世界の人たちのことも考えること、制度があればそれで十分なのではなく、それが活用されていること、また、制度で捉えられていない規範を含めて考えるべきであること等々、実際にある見過ごせない不正義をなくすことを目指した正義論)
 - 若松良樹 『センの正義論ー効用と権利の間で』 勁草書房、306ページ、2003年
 - 西川潤・下村恭民・高橋基樹・野田真里(編著) 『開発を問い直す: 転換する世界と日本の国際協力』 日本評論社、2011年
 - 松井彰彦・川島聡・長瀬修(編著) 『障害を問い直す』 東洋経済新報社、2011年 (「障害者の人権」関係)
 - 瀬谷ルミ子 『職業は武装解除』 朝日新聞出版、2011年 (「平和学入門関係」)
 - ジャン=ピエール・ボリス(著) 林昌宏(訳) 『コーヒー、カカオ、コメ、綿花、コショウの暗黒物語: 生産者を死に追いやるグローバル経済』 作品社、2005年 (「平和学入門」関係)
 - 清水正 『青年海外協力隊がつくる日本ー選考試験、現地活動、帰国後の進路ー』 創成社、2011年
 - Bob Reinalda "Routledge History of International Organizations" Routledge 2009
 - 小田川大典・五野井郁夫・高橋良輔(編) 『国際政治哲学』
 - 重富真一(編著) 『アジアの国家とNGO: 15カ国の比較研究』 明石書店、2001年
 - 日本国際ボランティアセンター(JVC) 『NGOの時代ー平和・共生・自立ー』 めこん、2000年
 - 峯陽一・竹内進一・笹岡雄一(編) 『アフリカから学ぶ』 有斐閣、2010年
 なお、重田康博 『NGOの発展の軌跡: 国際協力NGOの発展とその専門性』 明石書店、2005年の購入も予定していましたが、絶版のため入手できませんでした。

2011年度

- 田中優・檉田秀樹・マエキタミヤコ(編) 『世界から貧しさをなくす30の方法』 合同出版、2006年
- ヒューマンライツ・ナウ(編) 『人権で世界を変える30の方法』 合同出版、2009年
- 毛利聡子 『NGOから見る国際関係ーグローバル市民社会への視座』 法律文化社、2011年5月
 (2012年度夏には、この本を教科書として使った[集中講義\(8月7-10日\)](#)を毛利先生に始めて頂きました。先生の御多忙のため、概ね隔年開講を予定しています。但し、2014年度は、先生の御多忙のため開講できません。)

2012年度に新規開講の毛利聡子先生による「[NGOから見る国際関係—グローバル市民社会への視座](#)」関連の多数の推薦図書で、絶版でないものは図書館に入っています。在庫情報付き推薦図書リストは[こちら](#)(pdf、109KB、2013年2月26日改訂)

福島在住のルワンダ大虐殺体験者のKambenga Marie Louiseさん(NPO法人ルワンダの教育を考える会 理事長、福島市在住)の著書『空を見上げて—ルワンダの内戦そして希望—』(2010年7月1日発行、自費出版。500円。[目次はこちら](#)(pdf、83KB))

ルワンダの人々の生活、植民地住民どうしを争わせるためにベルギー人が生業区分であったものを「人種」として固定した事実、内戦勃発の事情、難民キャンプでの生活、日本でのJICA研修の時や難民キャンプの生活で気づかされた教育の重要性等。

副専攻「平和学」委員会代表・宮田がまとめて取り寄せました。孤児なども受け入れている彼女の学校の運営費になります。

NPO法人ルワンダの教育を考える会の活動等については次のところを見て下さい。そこにある「ウムチョムイーザ学園」が、彼女がルワンダに作り、運営している学校です：

<http://www.rwanda-npo.org/>

[新潟大学副専攻プログラムのページ](#) [新潟大学トップページ](#)